

海保青陵『稽古談』(日本の名著23 中央公論社1971)

本書は、江戸後期に活躍した海保青陵が朝廷や儒者に対して中国古書や人物を挙げて批判・批評、助言した書である。本書によれば、稽古というのは、古と今とを比べ合わせ見て、古のいろいろの事の中でも、抜きん出て良いことを考えて用いることであり、古と天下の治め方を考えて、今日の国や、家、自分自身と考え合わせて見る必要があるという。

冒頭では、孔子・孟子の法三章を取り入れようとする儒者や朝廷に対しての批判が述べられるとともに、孟子・孟子が生きた時代と治世の今(江戸後期)とでは社会的状況が全く違うこと。今のやり方には法三章以降の書や周礼(戦国以前に書かれたとされる書物)が合っていることを論理的に主張している。

また、本書後半では大名の在り方や藩財政の回し方について、地名と人物を挙げ紹介している。例えば、大阪の商人や多数の領地を保有する家系の考え方を物語形式で語り、経済が潤う方法を説いている。

以上が本書の概要だが、ただ、批判するだけでなく、新たな代替案を提示することを必ず行っている。中国古書を記した者、江戸の朝廷や武士、儒者、商人等の考え方を学べる点が魅力的である。

そして、昔の日本の儒者は海保青陵を含め、中国古書がよく挙げられることから、一部抜粋程度ではあるが、どのような内容なのか海保青陵の作品を通して知ることができること。

いずれにしても中国古書を参考にしているが、時代ごとに全く違う思想、考え方が展開されていることから、改めて多角的で多彩な学びが必要だと感じさせてくれる一書である。